

# アメリカ・カナダ視察レポート

北海道研究農場 飼料研究グループ 納多 春佳

## はじめに

読者の皆さま、はじめまして。飼料研究グループの納多（のだ）春佳と申します。北海道研究農場で実際に牛を管理しながら、主に代用乳やスターターの研究・開発を行っています。

本稿では、子牛の飼養管理について…ではなく、先日参加したアメリカ・カナダへの視察ツアーで感じたことをご紹介します。

## ツアー概要

今回のツアーでは、まずアメリカ・ウィスコンシン州で行われた「ワールドデーリエクスポ2019（以下エクスポ）」を見学し、翌日からカナダ・オンタリオ州へ移動して4題の座学とゲルフ周辺の5軒の酪農家を視察しました。予定では全9日間の旅程でしたが、日本への台風19号の接近により帰りの飛行機が欠航となり3泊延泊することに。カナダでは報道も少なく、スマートフォンで台風情報を把握しながらの滞在となりました。改めて、今回の台風で被災された皆様にはお見舞い申し上げます。

## 「大人も子供もエクスポに参加している！」

アメリカで参加したエクスポでは、「この道具見たことある！」と駆け寄ったり、販促品の風船を手に嬉しそうに歩いたりしている子どもの多さに驚きました。エクスポ中に開催されるショー用の牛舎では、糞かきを手伝ったり、ジュース片手に中継されているショーの様子を眺めたりする子どもの姿が目に残りました。いわゆる「お父さん」だけでなく、家族全体で酪農に積極的に関わっている風景は新鮮で、日本でも家族連れで楽しむことができる酪農・畜産イベントが増

えたら良いなと感じました。

ここで疑問だったのは、皆どのようにして牛舎を離れる時間を作っているのか？ということです。そのヒントは、翌日から訪れた酪農家にありました。



▲日本でもおなじみのメーカーがアイスクリームショップを出展。日替わりフレーバーも！

## 「人間と牛の動きが考えつくされている！」

カナダに移動してから、250～700頭規模の酪農家を見学することができました。カナダの酪農業界は、酪農家10,679戸（うち73.8%がタイストール牛舎）、経産牛969,700頭、頭あたりの年間乳量10,753kg（すべて2018年）と日本に似ています。大きく異なる点はクォータ制を利用した生産システムです。まず、あらかじめ決められた生産量の枠（クォータ）がそれぞれの州に割り当てられ、次に酪農家はそのクォータを市場で売買します。獲得したクォータの量によって生産できる生乳量が決まるという仕組みです。酪農家はクォータ量によって生産量を調節する必要がありますが、需給がコントロールできるため乳価が安定するというメ

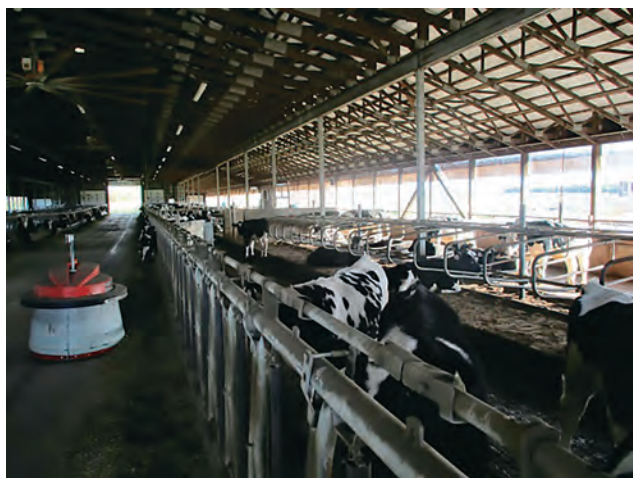
リットがあります。今回視察した酪農家も、年によって搾乳回数を変えたり、「2日で5回搾乳」という変則的な搾乳を行ったりと、工夫して対応していました。

今回の視察で伺った農場では、すべての牛がスムーズに採食・横臥・搾乳ができるような環境を、いかに従業員に負担をかけずに実施できるかがよく考えられていました。温度・湿度に応じて自動的にカーテンが開閉したり、待機場に床暖房を入れて凍結を防止したり、牛の快適性のための投資は惜しまないという姿勢を実感しました。

哺乳に関してはクォータ制により販売できる乳量に限りがあるためか、生乳がよく利用されていました。群飼養の子牛ペンに水槽のようなものをひっかけ、そこへ生乳を注いでがぶ飲みさせるという方法（milk troughで画像検索すると出てきます）で哺乳している酪農家もおり驚きました。自給飼料についてもコント



▲右に映っているような形の水槽に生乳を注いで哺乳します。視察時は取り外して干してありました。



▲どの農場にもエサ寄せロボットが配置されていました。そしてどの農場も牛床がきれい！

ラクターの利用などで良質なサイレージを大量に確保しており、「あるもので牛を育て、生産性を高める」という意識を強く感じました。

## 「家族を大切にしている！」

今回の視察で印象に残ったのは、ある酪農家さんの「搾乳ロボットを導入したことで時間のゆとりができ、日曜日は家族と過ごせるようになった」という発言です。土日関係なくフラットに働き続けるのが酪農家という職業だと思い込んでいたことに気が付きました。また、別の酪農家さんが学校から帰ってきた息子さんに「おかえり、学校はどうだった？」と声をかけ、そのまま息子さんも手伝いながら見学に同行する場面もあり、家族で牛を育てているという印象がありました。

これらを踏まえると、効率的な施設・飼養管理による時間のゆとりに加え、家族みんなで酪農に携わる意識がエキスポ会場のあの風景につながったのかなと思います。見学した土地柄も手伝ってか、生活の中に乳製品はもちろん、酪農家の仕事が溶け込んでいることを実感しました。日本においては、乳製品が身近に存在する中で、どのように生乳が生産されているかを知る機会は限られていると思います。

紙面が足りませんでしたでしたが、大学と企業の現場に即した連携の様子も見学することができ、これからの酪農に対して何ができるか深く考えるきっかけとなりました。皆さまに少しでも北米酪農のイメージが伝わりましたら幸いです。



▲ホームセンターに並ぶ哺乳用品。初乳製剤や代用乳、圧ベンコーンも販売されていました。